

サケ (シロザケ)

Salmo(Oncorhynchus) keta

サケ科



サケ

名前の由来

肉が裂け易いこと、あるいはアイヌ語のサクイベやシャケンベ (いずれも夏の食物の意) に由来するなどの諸説がある。「シロ」ザケは身の赤みがあまり強くないことからついたといわれる。別名：アキアジ (北海道) は秋味、秋に遡上するからか。漢字名：鮭(白鮭)

特定種

該当なし

形態的特徴

全長65cm。海にいる時には、銀白色。背面やヒレには黒点がない、尾柄が細い、尾ビレに銀色の放射状線がある、体高が低い。

脂ビレをもつ。(脂ビレ:背ビレと尾ビレの間のヒレ。サケ科、キュウリウオ科《アユの仲間も含む》、熱帯魚のカラシン亜目にのみ見られる。条《スジ》がない)

産卵期が近づくと、体色は黒ずみ、赤・黄・緑のまだら模様が現れる。

類似種と見分け方

サクラマス、カラフトマスなどの稚魚。

サケの稚魚は体高が低い。



サケの稚魚 (幕別町ふるさと館)

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
産卵期<河川>									産卵後死ぬ			
孵化・産卵床内<河川>	産卵後死ぬ											
稚魚期<河川>	産卵後死ぬ											
降海・河口<川・海>				産卵後死ぬ								
北上<海>						産卵後死ぬ						
北太平洋期<海>								産卵後死ぬ				
アリューシャン列島 ↓ ↑ 南下 (主に3年間繰り返す)												
カムチャッカ～千島を南下<海>							産卵後死ぬ					
河川を遡上・産卵<河川>												

魚類

底生動物

爬虫類
両生類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(鳥)
水辺類

(鳥)
草原・樹林
ワシ・タカ類

一 生

産卵期は8月末から翌2月。(北の方ほど早い) 2ヶ月でふ化し、ふ化後2ヶ月産卵床の中で卵黄によって育つ。その後3月頃から流れに現れ水生昆虫などを採り、4~5月の夜、雪解け水に乗り降海する。昼間ほとどまり、群れて餌を採る。

河口域で少し過ごし、パーマークが消え銀白色になり(銀毛・スマルト)、6~7月、沖合に移って北上を始め、北太平洋に向かう。

北太平洋では夏はアリューシャン列島周辺、冬は南下と移動しながら暮らし、成長する。

1~5回冬を過ごし2~6歳魚(50~70%が4歳魚)となって生まれた川に向かう。4~5月には北東太平洋、6~7月にはアリューシャン列島やベーリング海峡、8~9月にはカムチャッカ半島東沖から北太平洋に移動し、千島列島に沿って南下してくる。

9月頃から河川に入り、遡上を始める。河川に入ると餌は採らない。産卵後約1週間で死亡する。(寿命は主として3~4年〔2~7年〕)



産卵期を迎え、川を遡上するサケ

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・森林)
鳥類
ワシ・タカ

生息環境・分布

産卵床(仔魚期・浮上後しばらくも)は湧水の湧く比較的浅い砂利底。産卵床から浮上後の稚魚の淡水生活期間は数日から長くても1~2カ月と短いことから中・下流域が生息場所。その後、海に下る。

分布: 北アメリカのカリフォルニアからアジア側の朝鮮半島南端部までの北太平洋・日本海・オホーツク海・ベーリング海に面した河川、北極海の一部の沿岸河川に分布する。

国内では日本海側の九州北部以北、太平洋側の利根川以北の河川、北海道、東北地方、北陸地方に遡上する。

北海道では全域に見られ、十勝でも海に直接注ぐ河川に分布している。9月~11月の遡上期のみ見られる。漁業資源なので、ほとんどが下流~中流の捕獲場所までしか遡上できない。

食性

河川の稚魚はユスリカなど水生昆虫の幼虫。

河口域や港に達した稚魚は小型のカイアシ類やヨコエビ類。大きくなるにつれて、オキアミ類やヨコエビ類、小魚、イ

カなど。

遡上期には餌を採らない。

繁殖生態

産卵期は8月末から2月(北海道では11月頃までか)、産卵場所は比較的浅い砂利底の地下水が湧く場所。

産卵期には体は黒ずみ、赤・黄・緑のまだら模様が浮かぶ。オスは赤が強く、メスは黒っぽい。さらにオスの上あごが伸びて下あごに被さるように曲がる(「鼻曲がり」)。

産卵場で湧き水を探し当てたメスは、尾ビレをあおって砂利を舞い上げ、産卵床を掘る。メスは近寄る他のメスを追い払い、またオスはつがいとなるため激しく争う。巣の完成近くにはオスがメスを刺激する。

産卵時にはメスは産卵床に体を沈め、体を反らし大きく口を開ける。優位なオスがそれに並び(他のオスが並ぶことも)放卵に合わせて放精する(約10秒)。

産卵後メスは砂利で卵を覆う。産卵数は約3,000~9,000粒、赤っぽいオレンジ色で、卵径約8mm。一度に産むことも、

2~3回に分けて産むこともあるという。

メスは、他のメスが産み付けられないよう産卵床を守る(ホッチャレと呼ばれる)が約1週間で死ぬ。オスも産卵後死ぬ。卵は約2カ月でふ化。



湧水のあるところで産卵行動をとるペア

他生物との関わり

魚食性の動物の餌となる。このことは海で蓄えられた栄養が、陸にもたらされることを意味する。



かつきて死んだサケ。海の栄養を陸に運びあげる

興味深い話

■ どうやって遙かアラスカから生まれた川（母川）を探し当てるかについては、太陽コンパス説、地磁気説、海流説など諸説がある。母川近くの沿岸にたどり着いてからは、なおによって母川を探し当てるらしい。

■ 産卵期オス同士の争いの結果、負けた方は赤い模様が消え、メスのようになり、またメス同士の争いで負けた方は、赤っぽくオスのようになるという。

■ 低脂肪であるため欧米では「ドッグサーモン」とさげすまれたが、低脂肪であり、気温の低い時期にとれることから塩蔵に向き、日本では新巻として長く親しまれてきている。調理法としては塩焼き、照り焼き、フライ、マリネ、半身を野菜とともにみそ味で焼くちゃんちゃん焼き、頭の酢漬け、凍らしてルイベ、薫製、トバ、三平汁、石狩汁、いずし、卵巣や卵を塩漬けにした筋子やイクラ、腎臓の塩辛であるメフンなど多種多様。

■ 現在ほとんどのサケは人工ふ化によって放流されたものである。毎年約20億尾の稚魚が放流され、1990年には北海道において4千万尾を越す漁獲があった。

■ サケ漁は、春から初夏の北洋・表層流し刺し網漁が中心で、秋沿岸での定置網漁でも捕られる。人工ふ化用の採捕は、河川を横断するウライ（梁）で遡上をせき止め捕獲する。十勝川では千代田堰堤をウライ代わりに利用する。かつては川中の杭にメスを鼻輪でつないでおとりにし、寄ってきたオスをヤスでついで捕る方法も各地でおこなわれていたという。

■ 基本的に川の中及び河口周辺の500～1,000mの両岸は禁漁となっている。

■ サケは産卵後、ふ化・浮上するまでに積算水温で950℃以上必要なため、冬期間でも比較的暖かい湧水の湧出する

場所付近で産卵する。

■ 十勝地方のアイヌ語では「カムイチェブ（神・魚）」と呼ばれる。他の地方では「チェブ（魚）」「シペ（真・魚）」などと呼ばれる。アイヌにとって重要な食料源であり、瀬突き、ウライ（アイヌ語）などによって捕獲された。サケを殺す際には、ヤナギで作られた「イパキクニ」と呼ばれる棒で頭を叩いた。ヤナギは神事に使う「イナウ（幣）」に用いられる木であり、イパキクニを用いることで神への感謝を表したものである。アイヌはまた、サケの皮を靴や服を作るのに用いた。

■ 「イクラ」はロシア語から由来している。ロシア語では魚の卵一般を指す。



傷つきながらも遡上を続けるサケ

配慮事項

自然産卵のためには、産卵場まで遡上ができることが必要。また、湧き水の湧く砂利底が産卵場として必要である。人工ふ化事業の成功は、その密度、あるいは産卵床からの

浮上や降海において、自然状態ではない生活様式をサケに与えることになった。

参考文献

「漁業生物図鑑 北のさかなたち」長澤和也・鳥澤雅 編、(株)北日本海洋センター 1991

「山溪カラー名鑑 日本の淡水魚」川那部浩哉・水野信彦 編・監修、山と溪谷社 1989

「検索入門 川と湖の魚②」川那部浩哉・水野信彦、保育社 1990

「図説 魚と貝の大辞典」望月賢二 監修、魚類文化研究会 編、

柏書房 1997

「サケ・マス魚類のわかる本」井田齊・奥山文弥、山と溪谷社、2000

「アイヌ植物誌」福岡イト子、草風館 1995

インターネットページ

「札幌市豊平川さけ科学館・Q&A」<http://www.sapporo-park.or.jp/sake/qanda.html>

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・森林) 鳥類
ワシ・タカ